



昭和大学藤が丘病院 昭和大学藤が丘リハビリテーション病院

病院だより

2021年5・6月
第340号

病院だより第339号 (2021年5・6月号)
発行者 昭和大学藤が丘病院
発行責任者 昭和大学藤が丘リハビリテーション病院
編集責任者 藤が丘病院長 高橋 寛
広報・公開講座委員長 森岡 幹
〒227-8501 横浜市青葉区藤が丘 1-30
Tel 045-971-1151

新任のご挨拶

急行の止まらないベッドタウンの病院

昭和大学藤が丘病院 整形外科
神崎 浩二

令和3年4月より昭和大学藤が丘病院の副院長の任を拝命いたしました、整形外科の神崎浩二と申します。重責を担うこととなり非常に緊張感と使命感を感じております。



私は昭和62年に昭和大学を卒業し、その春に当院の整形外科に入局させていただきました。当院の開院が昭和50年ですので、開院12年目に藤が丘病院のスタッフとして働かせていただいたこととなります。開院当初の藤が丘や青葉台周辺は、田園都市線で都内へ仕事に向かう人たちのベッドタウンとして開発されました。当時はまだ新興住宅地で何も無い状態だったと聞いております。1980年代に沿線のたまプラーザが「金曜日の妻たちへ」という大ヒットドラマの舞台ともなり理想的なベッドタウンのイメージが定着したように思います。その後開発は進み田園都市線の各主要駅周辺は大変栄えております。田園都市線の朝のラッシュ時の混み方は日本一と言われるくらいになりました。特に急行の止まるたまプラーザや青葉台などの駅周辺の開発は凄まじいものがあります。私は若い頃には「藤が丘にも急行が止まるようになれば利便性もあがっていいのに」と思っていました。しかし今ではその思いも変わってきました。藤が丘にはベッドタウンとしての穏やかな空気が流れているように感じるので。人々にとって住み心地の良い環境があるように感じます。病院の立地としては、急行の止まらない藤が丘駅の近くにあるというのはベストな立地条件なのではないかと思うようになりました。周辺の住民の方々が安心して治療に専念するには非常に良い環境だと思っております。数年後には藤が丘駅前の再開発の一環として病院の建て直しも計画されております。住民の方々にとって理想的な病院づくりができればと思っております。

まだ副院長業務に慣れず四苦八苦している状態ですが、高橋寛病院長をサポートしつつ地域医療に貢献できる病院にするべく努力してゆく所存ですので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

「耐える聖火」と「耐える医療人」

昭和大学藤が丘病院 形成外科
門松 香一

新型コロナ禍の2回目の梅雨になりました。昨年のこの頃にはこのコロナに対して多くの人々が楽観的に考えていたと思います。しかし、現状は全ての年齢層の命を脅かしており、その対策に政府や地方団体が躍起になっております。やっとほとんどの医療者がワクチン接種を完了しましたが、一般の国民はまだまだワクチン接種が進んでいないにもかかわらず、非常事態宣言下であっても年齢別にも職業的にも温度差が感じられ、事態の収束が見えない状況です。平和の祭典となるべきオリンピックの聖火も強い風にあおられすぐにでも消えてしまいそうです。



さて、このような状況下で昭和大学藤が丘病院副院長を4月1日付けで拝命いたしました門松でございます。藤が丘病院でもこのコロナに対して多くの医師や看護師、事務職員が一丸となって対応しております。「もう、いい加減に収束してほしい!」と感じているのは飲食業だけでなく我々医療側が最も感じているところであります。それでも文句を言わずに粛々と患者対応を行っている職員には身内ながら大変感謝しております。

私は副院長の仕事として病院長の補佐はもちろんのこと、特に患者サポート、ベッドコントロール、医療材料管理、臨床研修などの教育を中心に担当しております。藤が丘病院の理念は“まごころ”を尽くし、医療の質・安全の向上、患者本位の医療、地域への貢献、医療人の育成です。私の担当はこの理念のもとにございますが、藤が丘病院の6基本方針のうち「大学病院として先進的医療を提供します。」「病病・病診連携を推進し急性期医療に対応します。」「安心・安全な医療を提供すべく医療従事者を教育します。」「信頼される人間性豊かな医療人を育成します。」の4つを担当することでもあります。この非常に重要なところを任されておりますので大変心引き締まる思いでございます。私は藤が丘病院はもちろんのこと昭和大学の医療人の一員として患者様の利益のためだけではなく、ここで働く職員の為に、そして地域医療の為にできる限りの努力を行っていきたく思いますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。

チーム藤が丘

藤が丘病院 脳神経外科 診療科長
藤が丘病院 脳神経センター センター長
津本 智幸

この度、昭和大学藤が丘病院脳神経外科診療科長および脳神経センター長に就任しました津本智幸です。

令和3年4月1日より寺田友昭教授の後任として、「脳血管内治療」を主体とした脳神経外科診療を引き継いでおります。大学病院として最先端治療を心がけるとともに、来院されるみなさまに安心していただけるよう「自身の家族であればどうするか」を心がけて診療してまいります。

私は平成7年に和歌山県立医科大学を卒業し、主に和歌山で脳神経外科診療を、平成18年からは米国ルーズベルト病院脳血管内治療センターで2年間研究を行いました。平成24年からは国立病院機構九州医療センター脳血管内治療科の立ち上げに参加し、約8年間福岡で過ごしてまいりました。一昨年よりご縁があり当院でお世話になっておりますが、現在までの国内外での経験を生かし、内科・外科の垣根を超え、メディカルの皆さまを含めた「チーム藤が丘」として脳神経センターをteambuildingしていきたいと思っております。また脳卒中に関しては急性期治療に加えて再発予防が大変重要になります。大学病院の強みでもある他診療科との連携を密にとり、「急性期から再発予防」まで最良の医療を提供していきます。

昭和大学藤が丘病院脳神経外科の目標は、神奈川県皆さまから信頼される医療を提供し、全国へ「藤が丘病院脳神経外科・脳神経センターのチーム医療」を情報発信することです。数年後には新病院への移転、さらに脳卒中対策基本法案による包括的脳卒中センターの認定など、今後脳神経センターを取り巻く状況が目まぐるしく変わってきます。これらを踏まえ、センター一丸となって努力していく所存です。まだまだ力不足ですが、今後ともご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



新人からのメッセージ



泣くな研修医

藤が丘病院研修医一年 石井 克政

今年度より昭和大学藤が丘病院で臨床研修医として勤務させていただきます、石井克政と申します。研修医1年目を代表しましてご挨拶させていただきます。

働き始めて早2ヶ月が経ちました。カルテの使い方を一から覚えたり、日々のサマリー作成に追われ、かと思えば地下の薬局へ麻薬を取りに行ったり、検査室に検体を提出しに何往復もしたりとあちこち動き回っている日々でした。気付くと「今まで勉強してきたことは何だったのか」と思えるほど全く頭を使っていない自分がいきました。しかし仕事を覚えていくにつれ今度は患者さん一人一人の病態を理解したり、それを踏まえて一人一人に合ったアセスメントやプランを自分で考えたりと、実臨床における考え方は複雑で大変難しく、「今まで勉強してきたことは何だったのか…」と再度気付かされました。

現在「泣くな研修医」というドラマが放送されていますが、ドラマのように格好良くもなく、華やかでもなく、上手くいかないことの方が多いですが、それでも泣きながら泥臭く着実に一步一步前進していきたいと思っております。

研修医一同これから精進して参りますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。



寄り添いの看護を目指して

藤が丘病院7階西病棟看護師 倉田 真穂

今年度より昭和大学藤が丘病院の7階西病棟に入職しました、看護師の倉田真穂と申します。

私は、父が脳腫瘍を患い長い療養生活の中、患者や家族に温かく接してくれた看護師に憧れ、看護師を志しました。その経験から、患者さんや家族に寄り添うことができる看護師を目指そうと考えています。

晴れて看護師となった今は、安全で安心な看護の提供や臨機応変な対応が出来るよう、先輩方のご支援を頂きながら知識や技術の獲得に励んでいます。学ぶことの多い日々ですが、徐々に実施できる技術が増えてお



り、やりがいや自信に繋がっています。

これからも様々な知識や技術を学び、自身の目標である患者さんや家族に寄り添った看護が実現できるよう、研鑽を積み成長し続けていきたいと考えています。そして、看護職として地域や医療へ貢献をしていきたいと思っています。

臨床研修薬剤師としての第一歩

藤が丘病院薬剤師臨床研修薬剤師 山本 理紗子

4月より昭和大学藤が丘病院で臨床研修薬剤師として勤務させていただいております山本理紗子と申します。私は、昭和大学5年次に藤が丘病院で実習をした経験があり、今年度から配属されたことを嬉しく思っております。現在は先輩方のご指導の下、調剤業務を中心としたセンター業務を通して処方箋やカルテから患者情報を読み取り、適切に調剤できるように日々励んでおります。

学生時代よりチーム医療の実践を学び、他職種や患者さんとのコミュニケーションが重要であると感じてきました。そのため、薬の知識のみならず、視野を広げた医療人として臨機応変に行動できる薬剤師を目指していきたいです。

まだまだ未熟ではございますが、患者様に近い薬剤師として、適正な薬物療法の実践に貢献できるように努めてまいります。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。



二刀流

藤が丘リハビリテーション病院リハビリテーションセンター
理学療法士 加藤 宏武

令和3年4月から昭和大学藤が丘リハビリテーション病院に配属されました新人理学療法士の加藤宏武です。徐々に職場にも慣れ、先輩方にご指導を頂きながら患者さんも担当させていただくようになりました。

コロナ禍で外出機会が減り、テレビで野球を観戦する機会が増え、NPBをはじめMLBも観戦することが多くなりました。現在MLBで大谷翔平選手が投打の「二刀流」として凄まじい成績を残しています。怪我なども重

なり、二刀流をやめ、投打どちらかに専念するべきとの声がありました。最近の大谷選手の活躍によりその声も少なくなってきたように感じます。



私は大谷選手の活躍を通じて、自分の可能性を信じることの大切さを感じました。

今はまだ目の前のことに精一杯ですが、理学療法士として急性期、回復期ともに対応できる技術を磨くことはもちろん、昭和大学に属する社会人としても病院内外問わず、至誠一貫の精神を持って精進していきます。ご指導の程宜しくお願いします。

運命的な出会い

藤が丘病院管理課 三田 大珠

4月より昭和大学藤が丘病院の管理課に配属された、三田大珠（たいじゅ）と申します。

私は学生時代、大学職員を就職先として希望しておりました。就職活動をする中で昭和大学に出会い、大学勤務以外にも国家資格を持ったプロフェッショナルな人たちと患者さんのサポートができる、病院勤務もできることに魅力を感じ入職いたしました。

現在の主な業務は厚生労働省や医師会など、各所から送られてくる文書の受付を行っております。

まだ、仕事でわからないことが多々ありますが、コロナ禍で忙しいはずの先輩方は、いつも嫌な顔一つせず優しく指導して下さいます。非常に恵まれた職場に勤めることができ、昭和大学に入職できたことを運命的のように感じました。

将来的には国家資格を持った医療従事者の皆様を完璧にサポートできるプロフェッショナルな人材として成長していきたいと思っています。今後ともご指導のほどよろしくお願い致します。



第38回 藤が丘地域連携フォーラムを開催して

令和3年4月8日(木)第38回藤が丘地域連携フォーラムを開催いたしました。

今回の藤が丘地域連携フォーラムは、新型コロナウイルスの感染状況を鑑みオンライン講演といたしました。年度始めのお忙しい中、56施設66名の医療機関の先生方等院外関係者の皆様、医師等院内関係者43名の総勢109名の方にご参加いただきました。皆様方には感謝申し上げます。

なお、次回の地域連携フォーラムは、令和3年7月8日(木)に開催を予定しておりますが、開催方法につきましては、今後の新型コロナウイルスの感染状況を鑑み審議してまいります。皆様方のご参加を心よりお待ちしております。

第38回藤が丘地域連携フォーラム講演会

1. 「関節リウマチと主な鑑別疾患について」

昭和大学藤が丘病院 内科 (リウマチ・膠原病)
井上 嘉彦

2. 「コロナ感染における嗅覚味覚障害」

昭和大学藤が丘病院 耳鼻咽喉科 野垣 岳稔
(藤が丘病院医事外来課 高橋 美保)

新型コロナウイルス流行下での 2021 ワールドトライアスロン横浜大会

「2021 ワールドトライアスロン・パラトライアスロンシリーズ横浜大会」が5月15・16日に開催され、医療スタッフとして当院と横浜市北部病院の医師、看護師が参加しました。新型コロナウイルス流行で2020年は中止となり、2年ぶりの開催となります。

感染流行が未だ収束しない中での、東京五輪・パラ大会直前の大規模大会開催であり、その対策や医務対応は注目されたのではないかと思います。

15日のエリート大会は、世界各国からパラ選手を含め合計183名のエリート選手が参加し、海外選手の受け入れでは「ハブル方式」を採用し、入国前から大会終了まで健康調査とPCR検査が実施されました。当然、我々も大会前にPCRを行い、医務対応時はマスクとアイガード着用でした。16日のエイジ大会(一般参加)は参加人数も多く、感染対策としてはこちらの方が心配でしたが無事終了となり、両日通し大きな事故もありませんでした。

今年は集合写真が掲載出来ません。理由は想像に難くないと思います。かかる状況の中、参加したスタッフの方、本当にお疲れ様でした。

(藤が丘病院 循環器内科 磯 良崇)



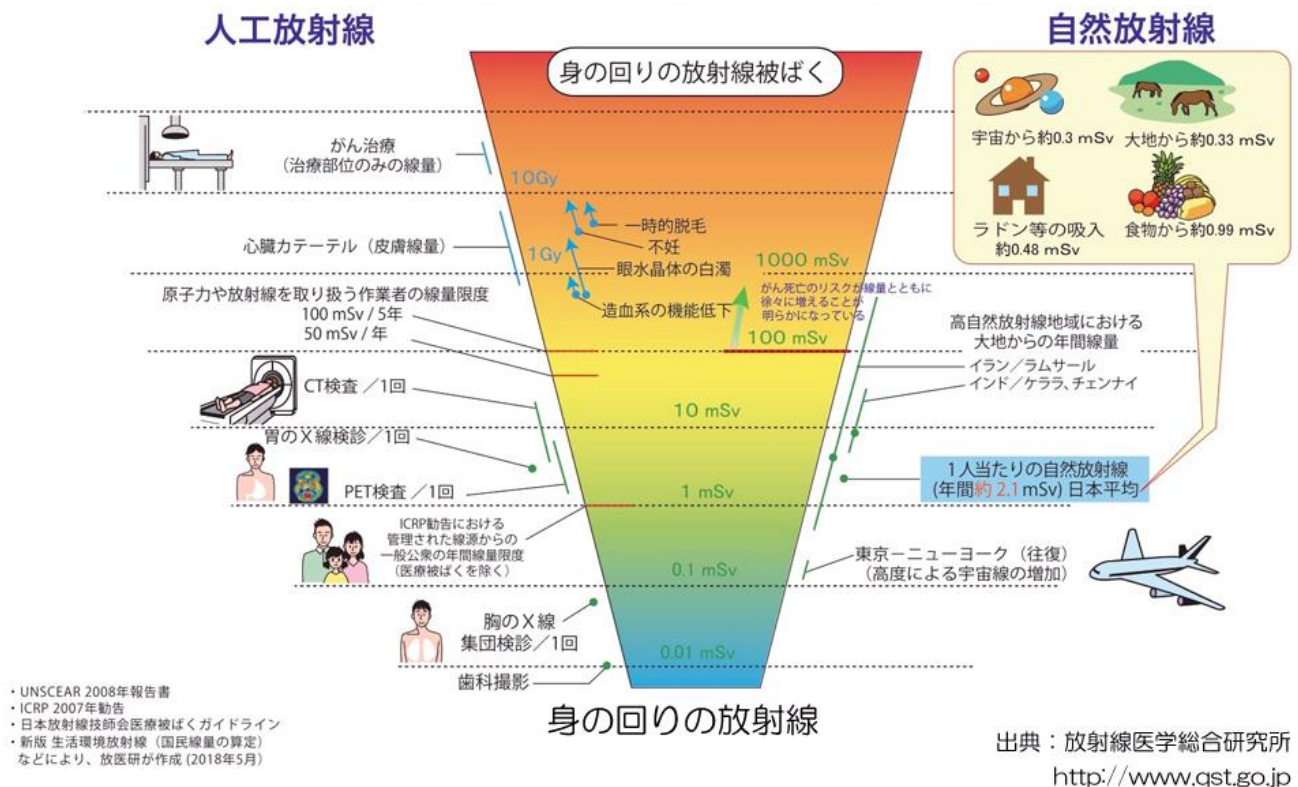
安心して放射線検査を受けるために！！

今回は、放射線は適切に管理されている状況下で使用する場合は、安全であることを説明致します。また、放射線検査・治療を患者さんに安全かつ安心して受けて頂くために、当院、放射線技術部が実際に行っている放射線被ばく低減における取り組みについてお伝え致します。

1. 身近な放射線

自然界に存在する放射線を自然放射線と言います。私たちは微量ではありますが、常に自然放射線により被ばくしています。年間の被ばく線量は世界平均で約 2.4mSv、日本平均で約 2.1mSv となりますが、自然放射線による健康影響が発生している報告はありません。その他、身の回りには、いろいろな放射線があります。

放射線被ばくの早見図



*Sv (シーベルト)：人が受ける被ばく線量の単位。
1 Sv = 1000 mSv

2. 放射線の人体に与える影響

放射線検査は、病気の早期発見、治療効果判定に用いられ、放射線検査による患者さんの利益が大きいと判断された場合に行われます。

放射線の影響は、確定的影響と確率的影响に分類されます。確定的影響はしきい線量（影響が発生する最低線量）があり、この線量を超えなければ影響の発生は無いと言われていています。確率的影响には、がん、白血病、遺伝的影響があります。100mGy 以下の被ばくにおける確率的影响発生リスクは、検知できないくらいわずかな影響であると考えられています。確定的影響および確率的影响ともに 100mGy 以下では影響の発生はほとんどないと考えられています。一般的な放射線検査で受ける放射線量は 100mGy を超えることは無く、一般的な放射線検査 1 回で受ける放射線量は少なく、健康に影響を与えることはほとんどありません。繰り返し受ける場合でも、期間が空くことで体の中では放射線の影響に対する修復効果が期待できるため、毎回の線量を加算して影響を心配する必要はありません。

*Gy（グレイ）：放射線を受けた単位質量の物質が吸収するエネルギー量の単位。吸収線量と言います。放射線が人体に当たった場合、放射線の種類やエネルギーにより人体への影響が異なります。そのため、吸収線量から計算式を用いてシーベルト（人体への放射線の影響）の値を求めます。全身に均等にガンマ線が1mGy当たった場合、人が受ける被ばく線量（実効線量）は、1mSvとなります。

3. 当院の放射線検査被ばく低減における取り組み

国際放射線防護委員会は、「放射線を用いた診断と治療で生じる患者の医療被ばくにおいて、適切に防護と最適化を行うためのツールとして診断参考レベル（DRL）が用いられる」と定義しています。国内では、医療被ばく研究情報ネットワーク（J-RIME）の活動によって関連する学協会の協力のもとに、最新の国内実態調査結果に基づいてDRLs2020が設定されました。

当院では、そのDRLs2020を基に放射線検査・治療に関連する撮影条件や放射性同位元素の投与量を決定しています。

また、診療放射線技師の職能団体である日本診療放射線技師会が認定する医療被ばく低減施設認定（第29号認定）を取得しています。これは、放射線量管理と防護の最適化を実践するための基準を満たした施設であることを指しています。

患者さんに安心・安全な放射線検査・治療を受けて頂くために、放射線技術部は、医師、看護師、その他の職種の方々と共に放射線の管理について取り組んでいます。

4. まとめ

当院では、診断・治療に用いる放射線量は、医師・診療放射線技師が管理を行い、身体に影響の少ない放射線量を適用しています。放射線検査・治療で受ける放射線被ばくのリスクより、病気の診断が得られる利益の方がずっと大きいため、医師が指示した放射線検査を受けられることをお勧めします。

放射線に関するご質問は、放射線技術部へお問い合わせください。

（藤が丘病院放射線技術部 高瀬 正）

診療統計 2021年4月・5月

	藤が丘病院		リハビリテーション病院	
	2021年4月	2021年5月	2021年4月	2021年5月
外来患者数	22,362人(894.5人/日)	19,991人(869.2人/日)	4,348人(173.9人/日)	3,998人(173.9人/日)
入院患者数	14,725人(490.8人/日)	14,445人(466.0人/日)	5,079人(169.3人/日)	5,318人(171.5人/日)
紹介率	79.3%	76.2%	73.3%	67.5%
逆紹介率	92.2%	97.5%	83.6%	91.0%

＜広報・公開講座委員会委員＞

森岡 幹、川手 信行、原田 浩史、鈴木 洋、佐々木 春明、今井 敦、市川 度、
 中田 土起丈、小岩 文彦、西村 栄一、小林 孝弘、泉 紀子、前田 うづみ、佐藤 美津恵、
 山寺 志保、黒田 上総、岡部 圭吾、門田 美佳、山田 大暉、高橋 良治、（順不同）